

新美南吉記念館だより

NIIMI NANKICHI MEMORIAL MUSEUM NEWS

発行 新美南吉記念館 〒475-0966 愛知県半田市岩滑西町1-10-1 Tel. 0569-26-4888 <http://www.nankichi.gr.jp>



五月五日（土）、半田市民交流センターで第三十三回新美南吉童話賞表彰式を行いました。

式典ではまず半田市教育長が挨拶をし、回を重ねて歴史ある賞になってきたことや、受賞を誇りに思っていることなどを話しました。それから、出席された十名の受賞者へ賞状が手渡されました（写真①）。

続く作品講評では、審査員長の藤田のぼる先生が登場され、「登場人物に名前をつけるというのは、作品を作るうえでの楽しみの一つ。最優秀賞の作品には固有名詞がないが、逆にそれが良かった。オマージュ大賞の「モカ」は、名前からコーヒーなのか、イメージからなのかと想像が出来て良かった。みなさんも名前に物語をこめて、これからも頑張ってください」とまとめられました。

その後、最優秀賞を受賞した小塚翔子さんから、受賞の言葉をいただきました。小塚さんの受賞作「雪虫」は、これから冬を迎える森を舞台にしたお話で

す。その内容を引き合いに出しながら「私も雪鬼の仲間間で冬が大好きです。この作品は夫と北海道の凍った真つ白な湖の上を歩いた思い出から、夫が作った曲に合わせて考えました。二人の大切な思い出が詰まった作品で、今お腹の中にいる子を含め、三人にとつて受賞が励みになりました。辛い世の中ですが、それでも美しい自然に囲まれて、これからも作品を作って行きたいです」と語られました。

それから式は受賞者の朗読へ移り、「きりんの会」の竹内照子さんが「雪虫」を、「南吉童話お話の会でんでんむし」の前田早苗さんがオマージュ大賞受賞作「悲しみ、買います」を朗読されました（写真②）。出席された方々は、今回の入選作品集『赤いろうそく』を開いたり、文字を追わず声だけに集中して、朗読を楽しんでいました。

以上で閉式となり、式典後は記念撮影の時間に。新美南吉童話イメージキャラクターの「ごんぐくん」も参加して、会場を和ませました。（写真③）

受賞者へのインタビュー

自由創作部門最優秀賞を受賞された、小塚翔子さんにお話を伺いました。



— 受賞の連絡を受けた時どう思われました？

正直すごい驚きまして、涙が止まりませんでした。こんなことはめったにないですから。

— 今までほかの賞に応募されたりは？

ずっと脚本を書いてきたので、脚本のコンクールに応募することはありましたが、なかなかそちらで賞をいただくことはなく……。お仕事はさせていただいておりました。

— では、普段からお話を書かれているのですか？

そうですね。脚本の方も自分で物語を考えますし、脚本でなくお話調のものを書いたりといった機会も何度かありました。

— 今回、脚本ではなく童話に挑戦されようと思ったのは何故でしょうか？

祖父の姉がイギリスの児童文学の翻訳をしていたんです。その関係でいろんな本をいただいて、小さい頃から本を読むのが好きでした。自分もいずれこんな作品を書きたいと物まねのように書いていたのが、中学校と上がるにつれ、物を書くなら脚本だ、となっていくきました。だから心のどこかに児童文学へのあこがれのようなものがあって、挑戦しようと思いました。

— 受賞作「雪虫」を思い浮かべたきっかけは？

私は高校を卒業してすぐ、北海道の「富良野塾」というところで脚本の勉強をして、その時に雪虫を見て存在を知りました。後はずっと東京にいましたが、三年ほど前に主人と北海道の道東を旅したんですね。そこで主人と冬の凍った湖を一緒に歩きました。その思い出から主人が曲を作ってくれて、その曲に合わせて何か朗読できる物語を書こうと思って書いたのが「雪虫」でした。もちろんそこから

推敲を重ねて形は変わっていきます。

— 童話を書くうえで工夫したことはありますか？

最初は何年生くらいが読むか考えて、漢字に気を付けていきましたが、縮める過程で結構増やしてしまいました(笑)。あとは、季節のつながりだったり命のつながりだったり、そういうものを表現できればな、と。北海道に移住したのは最近ですが、自然からいただく暮らしを通して、これかもそんなテーマでお話を書いていきたいと思っています。

*

オマージュ部門大賞を受賞された、数井美治(筆名)さんにお聞きしました。



— 受賞の連絡を受けた時、どう思われましたか？

自分自身、納得できるものができたと感じていたので、連絡を頂いたときは大変嬉しく思いました。

— 普段からお話を書かれているのですか？

短編から長編まで色んなストーリーを書いていきます。童話ですと昨年、第三十七回日産童話と絵本のグランプリにて大賞を頂きました。「ながみちくんがわからない」というタイトルで書籍化しております。

— 今回、オマージュ作品に「でんでんむしのかなしみ」を選ばれた理由を教えてください。

大学時代、日本文学論の講義の中で教授が「でんでんむしのかなしみ」について熱心にお話して下さったことがあり、それ以来ずっと心に残っていました。オマージュするならば縁のあるこの作品が良いと思い、選びました。

— 受賞作「悲しみ、買います」には数井さんの実体験なども含まれているのでしょうか？

普段、登場人物とは距離を置いて創作をしているつもりですが、私自身、家族のように過ごした愛犬を失ったことがありますし、十代のうちに母を亡くしています。そういった実体験

から得た私なりの考えのよなもの、どうしても滲んでいっていると思います。

— 作中の描写が綺麗で印象に残りましたが、今回のお話を書くうえで意識されたことはありましたか？

新美南吉の作品は、情景描写の美しさも魅力のひとつと感じます。オマージュをするのであれば、その特色にも敬意を払いたいと思います。情感のある描写を意識しました。

— 今後も創作活動は続けて行かれますか？

書くことが好きなので、どんな形であれ、表現は続けていくと思います。ジャンルにとらわれず、様々な作品に挑戦してみたいです。

*

お二人の作品をはじめとした、第三十三回新美南吉童話賞入選作品集『赤いうそく』は、記念館で販売しています。通信販売も承っておりますので、購入を希望される方は下記QRコードをご覧ください。



新美南吉没後79年「貝殻忌」

三月二十一日(火)は南吉の命日「貝殻忌」です。コロナ禍以来、久しぶりにイベントの開催を予定していましたが、まん延防止の延長を受け一部中止となりました。

今年三月十九日(土)～二十日にかけてイベントを開催しました。二十日(日)にはガイドと岩滑を歩く「貝殻忌ウォーク」と、「歌とお話の会」を、二十一日(月)には二年ぶりに「貝殻忌講演会」を行うことができました。

講演会の演題は「雑誌『赤い鳥』に集った青年たち——新美南吉と森三郎を中心に——」です。酒井晶代先生(愛知淑徳大学教授・写真左)を講師にお招きし、郷里が近く共に『赤い鳥』に作品を投稿した南吉と三郎を比較しながら、同誌がつかない



だ縁や意義についてお話いただきました。南吉と三郎は相似点があるものの、北原白秋と鈴木三重吉、どちらに師事したかによって生まれた違いがあることなど、興味深い内容でした。講演録は今年度末発行の『新美南吉記念館研究紀要』に掲載する予定です。また十六日(水)～二十二日にかけて、今年も南吉へのメッセージや貝殻の折り紙を募集したところ、たくさんの方の応募がありました。郵送・メール・ツイッタールにて、メッセージ二十通、イラスト二十枚、折り紙七八四個が届き、記念館のエントランスに飾らせていただきました。そして命日当日に、南吉の墓前に供えました。

今年コロナ禍以前と以後、それぞれのやり方を取り入れた「貝殻忌」になったと思います。

アラビア語になった「まんぎつね」

先日、記念館へアラビア語に訳された「まんぎつね」の絵本が寄贈されました。この絵本は東京外国語大学の学生と講師の手によるもので、翻訳に至った経緯をお伺いしました。

翻訳に携わったのは、言語文化学部アラビア語二年生の吉岡珠美さんと、アラビア語外国語教員のフセイン・ハルドゥーン先生です。きっかけは、一年生までに文法の勉強を一通り終えた吉岡さんが、「何か翻訳してみよう」と思われたこと。まずは子ども向けの作品からと考えて、思いついたのが「まんぎつね」でした。小学校の教科書で読んだ時から心に残っていたそう、たまたま実家にあった「まんぎつね」の本を読み、巻末の著者紹介で南吉が東京外国語学校(現・東京外国語大学)の卒業生であることを知り、これは訳すしかないと思われたそうです。そうして訳した「まんぎつね」をハルドゥーン先生に見せたところ、絵本にしてみようとプロジェクトが立ち上がりました。

推敲では、吉岡さんが選んだ言葉を尊重しつつ、ハルドゥーン先生が間違いを直したり、障子や土間などをアラブの世界にはないものを、アラブの人にも分かるように直していききました。たとえば「はりきり網」であれば、「はりきりと書いて

たとしても子どもに宗教を教えるための絵本ばかりで、一般的にはイソップなど外国の本が読まれているからです。そのため、日本の絵本を翻訳することが、アラブの人たちのためになるのではないかということでした。



も意味が分からないので、「魚を獲る網」としたそうです。

ちなみに、アラブの国にはアラビア語の絵本はもとより、子ども向けの本が少なく、子ども向けの絵本が少なさから、日本にあるような絵本がなく、あつ

今回刊行された『まんぎつね』は既に国内の学校などへ配られています。さらに中東地域に関心のある方や、パレスチナで子どもたちを支援する団体などからも、本を送って欲しいという声が届いているそうです。

今後は他の生徒にも南吉の絵本を軸に翻訳を呼びかけていく予定で、既に「まんぎつね」だけでなく「手袋を買いに」もアラビア語に訳されました。南吉の母校で始まった取り組みに、注目です。

記念館からのお知らせ

新美南吉生誕 110 年ロゴマーク&グッズデザインが決定しました!

デザインコンテストに応募があった 723 点の中から、厳正な審査を経て最優秀賞を決定しました。
今後、令和 5 年の新美南吉生誕 110 年へ向けて活用していきます。



◀ 【ロゴマークの部】

最優秀賞

作者/友弘勝之さん

【グッズデザインの部】 ▶

最優秀賞

作者/神谷真由美さん



企画展「一枚の葉書」は「蟹工船」のオマージュか?

童話「一枚の葉書」の謎から、南吉のプロレタリア文学への関心や教育観に迫ります。

会期 7月3日(日)まで



©山本正子

生誕 110 年グッズ販売のお知らせ

新美南吉生誕 110 年ロゴマークと PR グッズデザインを使用した、ポロシャツ&トートバックが発売されました。5 月 20 日まで予約販売をし、6 月以降、一般販売もいたします。おみやげに一ついかがでしょうか。

販売所 記念館内 cafe&shop「ごんの贈り物」
アイプラザ半田(半田市観光協会)

【ポロシャツ】
2,500 円(税込)

【トートバック】
1,500 円(税込)

グッズ見本 ▶



日誌抄

一月(睦月)

▼24日 南吉の教え子・角岡美代子さん逝去

二月(如月)

▼4日 岩滑小学校北壁面に、看板「ごんぎつねが生まれた岩滑小学校」が設置される

▼5日 堀江製函合板所から狐のコースター 150枚が寄附される

▼6日 「令和三年度新美南吉読書感想画コンクール受賞作品展」終了

▼22日 新美南吉

生誕 110 年デザインコン

テスト審査会。於半田市役

所大会議室▼27日「ペー

パーアート教室」。10人参加

三月(弥生)

三月(弥生)

▼5日 第33回新美南吉童話賞表彰式。於半田市市民交流センター▼6日「ごんのかわら版4コマ」ミニ展示始まる

▼16日 没後79年「貝殻忌」メッセージ等募集開始(3月22日)▼

18日 新美南吉生誕110年デザインコンテスト結果発表▼同日 CBCラジオ

「北野誠のズバリ」。記念館から生中継で童話の森の整備活動などについて紹介される

▼19日 つばさ幼稚園の園児5人が代表して、園児たちが折った貝殻を記念館へ贈呈▼19~22日「南吉クイズ」。166人参加

▼20日 「貝殻忌ウォーク」。7人参加▼同日「うたとお話の会」。26人参加

▼21日 貝殻忌講演会「雑誌『赤い鳥』に集った青年たち」新美南吉と森三郎を中心に」。86人参加。

於半田市福祉文化会館講堂

▼27日 第179回新美南吉読書会。15人参加